日本経済論（第２回）　　１６．４．１９

－日本の経済成長率の推移：高度経済成長から時にはマイナスの低成長へ（安孫子）

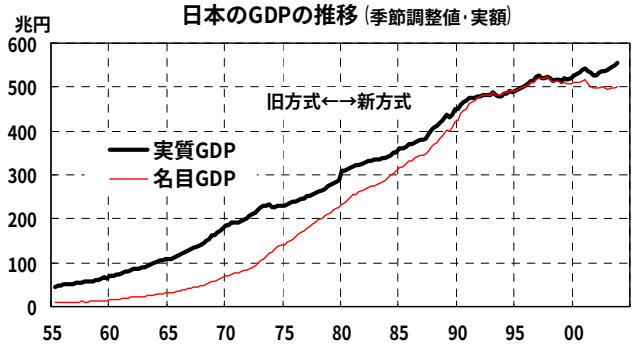
１．経済成長率とは？

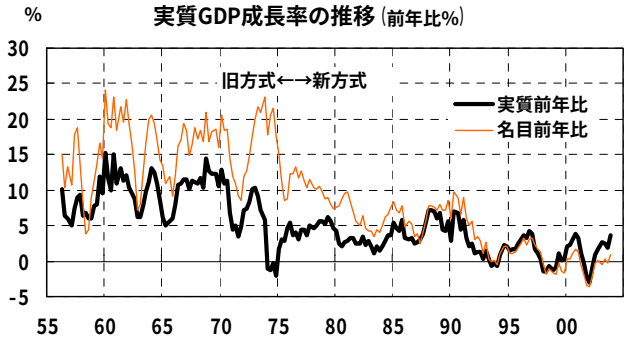
・日本経済の全体をみるときの最も重要な指標のひとつ。実質 GDP 成長率でみることが多い
・データ源　http://www.esri.cao.go.jp/index.html（内閣府）、『国民経済計算年報』ほか

２．GDP 統計（国内総生産）をみるときの注意点

・一定期間に日本経済全体が産み出した「**付加価値**」の合計 ← 売り上げではない
・**四半期毎**にﾃﾞｰﾀ作成（四半期ﾃﾞｰﾀ、暦年ﾃﾞｰﾀ、年度ﾃﾞｰﾀ）・・・ 発表までに約１か月半も
・１次速報・２次速報・確報（SNA）・・・ 新しい情報を加味してデータが改訂される
・名目値と実質値（基準年時点の価格で換算）　・・・ 両者の違いが「GDP ﾃﾞﾌﾚｰﾀ」（一種の物価）
・四半期データには強い**季節性** ⇒ 原系列（前年比に意味）と季節調整系列（前期比にも意味）
　― 日本では前年比を注目する経済データが多いが、GDP については「季節調整済み年率」が注目されるようになってきた。前期比のメリット：変化をより早く認識できる
・**需要項目別の動き**がわかる：民間最終消費支出、民間住宅、民間企業設備、政府最終消費、公的固定資本形成、財貨・サービスの輸出入（輸入はﾏｲﾅｽ項目 ⇔ 輸出はﾌﾟﾗｽ項目）
・三面等価の原則：生産、支出、分配が一致する筈・・・国内総生産＝国内総支出

３．日本の GDP の推移





・名目・実質ともに約 500 兆円：日本全体では年間約 500 兆円の付加価値を生産
・このところ、名目 GDP は緩やかな低下傾向 ・・・ 前年比はﾏｲﾅｽの傾向
　⇔ 実質 GDP は拡大傾向 ・・・ 前年比はﾌﾟﾗｽの傾向（数字のマジック？）
　これは、物価が下落していることを意味（近年では、持続的な物価下落を「デフレ」と呼ぶ）
・前年比は、上がったり下がったりの循環を見せている　←　景気循環（次回）を示唆

４．戦後日本の経済成長の時期区分

・「高度成長期」（1973 年頃まで）← 1971 年ﾆｸｿﾝ･ｼｮｯｸ、1973 年**第一次石油危機**
・安定成長期（1974～86 年頃まで）← 1979～80 年の**第二次石油危機**を克服
・「バブル期」（1986～90 年頃まで）← バブルの崩壊（1990 年に株価、91 年に地価が反落）
・バブル崩壊後の低成長期 ← 円高（1995 年頃）、金融不安（1997～98 年頃）
　―「失われた 10 年」といわれることも。不良債権問題など、ﾊﾞﾗﾝｽｼｰﾄが注目される

５．世界経済の大きな環境変化にも注意

・東西冷戦の終了＋アジア諸国の経済発展＋中国の改革開放路線の成功：輸出での競合↑
・ＩＴ革命など産業技術の大きな変化 ・・・ 日本経済は追随者にとどまる

以上